

## 潜水士・渋谷レポート

湘南・江ノ島の潜水調査を終えて  
～継続調査から見えてくるもの～

快晴だった3月25日、湘南・江ノ島の海を潜った。今年になって初めての江ノ島だ。

ここ4年あまり、毎年1月と2月は必ず江ノ島の海を調査してきている。今年も冬の透明度の良いうちにどうしても調査をしたいと思っているので、実行できホッとしている。

江ノ島を毎年、調査するのは、定点観測を行って、海中の生物環境や海藻がどうなっているのか、移り変わりを確認したいからだ。自主調査であるが、ここから得られる知見は大きい。毎年、継続して海中を観察していると、必ず海からのメッセージがある。

湘南・江ノ島の海は、海藻豊かな海だ。いや、海だったと言葉を変える必要が出てきている。なぜなら、私が10年前に潜った時の江ノ島の海中と現在の海中の環境は大きく変わってきたからだ。特に海藻の量は圧倒的に減ってきている。

海藻の中でも特に重要なアラメ、カジメといわれる大型海藻がほとんど姿を消してしまっている。海の砂漠化「磯焼け」だ。地球の温暖化が「磯焼け」という現象を起こしていることを、日本各地の海で見えてきた。湘南の海は大丈夫だと思っていたが、4年前に潜った時に、カジメが消えかかっていたので驚いた。

自分の足元の海が磯焼けになり慌てた、そして気付かなかったことを申し訳なく思った。

多くの人々が湘南・江ノ島の海を訪れ楽しむ。その海中が淋しくなっていることに胸が痛み、何とかしなくてはと思いながら毎年潜水して状況を確認している。もしかしたら、今年はアラメ・カジメ類が戻ってくるかもしれない、磯焼けは一刻の現象<sup>いっとき</sup>だけかもしれない、そういう期待と不安を持ちながら4年目を迎えている。

残念ながら年を追うたびにアラメ・カジメ類は減少の一途。

今年は、背丈が1m近くある茎の太い屈強なアラメ・カジメは1本も見られなくなった。(去年は、少ないが所々に親のアラメ・カジメが観察できたが。)

回復するどころか、磯焼けがさらに進行していることに無念さが湧く。

そんな状況であったが、幸い、波の荒い水面際海藻・ホンダワラ類は、まだ残っていた。冬から春に向けて繁茂するホンダワラ類が元気に育っている。救いだ。今年はヒジキが多い。ヒジキは水面ぎりぎりのところが生息域なので、海藻を食べる魚やウニ類に食されることが少ないからだろう。

## 潜水士・渋谷レポート

このヒジキやホンダワラ類だけでも死守しなければ…そう思って潜水調査を終えた。磯が上がったら、潮位が一番低くなる時刻だった。水面際で波に揺れるヒジキたちが輝いていた。雲に少し隠れた富士山と伊豆の天城の山々が遠くに見える。それを背景にヒジキの写真を撮ってみた。このヒジキが来年も、再来年もみられることを祈りながらシャッターをきった。帰りの車中で、「江ノ島もこの有様、日本の海は今、大変なことになっている…それをどう伝えたらよいのか、どう再生したらよいのか」本気で取組む必要性を感じた。海の恵みに感謝する同志を一人でも多く見つけなければ…。



2020年3月25日 湘南・江ノ島の海(海藻はヒジキ)



2020年3月  
潜水士 渋谷 正信

株式会社 渋谷潜水工業  
(一社) 海洋エネルギー漁業共生センター